

『東西ベルリン動物園大戦争』

ヤン・モーンハウプト著 黒鳥英俊 監修 赤坂桃子 訳
CCC メディアハウス 書籍:2600円(税別) 電子書籍:2080円(税別)

動物園人たちの現代史

会員 吉見 洋人(72期)



ベルリンは二つの動物園を持っている。一方は1300種、2万点近い飼育数を誇る世界最大級の動物園、ベルリン動物園(Zoo-Berlin)。他方は、ヨーロッパ最大級、160haの敷地面積を有するティアパルク(Tierpark Berlin)である。本書は二つのベルリン動物園史を、それぞれの動物園を代表する園長であったハインリヒ=ダー＝テおよびハインツ=ゲオルク・クレースの二人の視点から描いていく。

そもそもなぜ一つの都市に二つの動物園があるのか。1844年の開園以来、ベルリン動物園が都市を代表する動物園であり、また、ドイツを代表する動物園であった。しかし、第2次世界大戦における空爆でベルリン動物園は壊滅的な被害を受けてしまう。1400種4000頭いた動物たちは度重なる空襲、飢餓、飼育環境の悪化で91頭まで減ってしまう。ベルリン動物園の苦難はそれとどまらない。冷戦の開始である。ベルリンは分割され、西ベルリンは東ドイツの真ん中に浮かぶ陸の孤島となった。それでも動物園を愛するベルリン市民によってベルリン動物園は徐々に復興を果たしていく。

一方で、東ドイツは市民たちの保養の場として、また西ベルリンに位置したベルリン動物園に対抗して国家の威信を示す場所として新しい動物園をベルリンに欲した。こうしてティアパルクが建造されることになる。そして、動物園の構想段階から関わり、初代園長としてティアパルクを発展させたのがダー＝テである。

こうした中、ベルリン動物園は戦後直後の動物園を支えた園長、カタリーナ・ハインロートの後任として30歳の少壮の園長、クレースを抜擢する。クレースはダー＝テという巨人を常に意識しつつ、ベルリン動物園を再び世界一の動物園へと発展させていく。

本書は豊富な資料や聞き取りに基づき、事実を淡々と描写するスタイルを取っている。それでも本書がドラマとして読者を引きつけるのは本書に登場する人物たちがいずれも魅力的だからであろう。ダー＝テは、学術的な動物園という理想に専念する人物であり、動物学とティアパルクのために全てを捧げている。家族旅行に来ても、子供たちを放つて珍しい動物を探そうと海岸を歩き回る人物である。皆が認める権威であってシャタージ(東ドイツの秘密警察)ですら手が出せない。クレースはティアパルクよりも歴史があり、また飼育種類も頭数も多いベルリン動物園園長であるにもかかわらず、ダー＝テのような権威を確立することができない。一方では実務能力に優れ、資金集めや珍しい動物の獲得に能力を発揮する。

その他の人物たちも魅力的である。序盤の主人公でもあり、女性であるがゆえの圧力を受けながら戦後直後のベルリン動物園園長として動物園の復興に尽力するカタリーナ・ハインロート。ライプツィヒ動物園副園長であり、ダー＝テの右腕でありつつ、自由を求めて西側へと亡命することになるローター・ディトリヒ。デュースブルグ動物園園長でありながらハンターとして、自ら世界中を回って新しい動物を捕まえるヴォルフガング・ゲヴァルト。その他の人物たちも魅力的である。彼ら「動物園人」の魅力が本書最大の特徴と言ってよいだろう。

本書は、冷戦史ではなく、また東西ドイツ史でもない。あくまでベルリン動物園史である。しかし、動物園を通じて、現代史を眺めることができるようになっている。もちろん冷戦が本書全体を通底する背景となっていることは当然である。しかしながら大気汚染問題や動物愛護運動など、動物園に関わる出来事は冷戦にとどまらない。現代史の多様な側面が動物園史を通じて見えてくる。